

S. Ashina

<オリエンテーション>**A. テーマ：キリスト教と社会理論の諸問題（3）****B. 講義目的**

現代世界において宗教は、深刻な対立要因の一つと見なされている。この対立図式自体の問題性は別にしても、キリスト教がこうした文脈で問われていることは否定できない。講義では、キリスト教と社会理論との関係という視点から、この問題領域にアプローチしたい。

C. 講義内容

本講義は、数年前より開始した「キリスト教と社会理論の諸問題」をテーマとした講義計画（今後5年程度をかけ、体系的な議論を展開することを予定）に位置づけられるものであるが、今年度は、昨年度の講義内容（近現代における宗教哲学の可能性についての考察、聖書学から社会科学への接続の問題）を簡単に確認した上で進められる。前期の講義では、昨年度の議論において残されていた、聖書学から政治思想・政治哲学への展開について、イデオロギーとユートピアという問題を中心に考察を行う（マルクス、マンハイム、ティリッヒ、リクールら）。後期の講義では、「経済と環境」をめぐる諸問題が取り上げた後に、再度、宗教哲学構想を再考する予定である。

以上が、本年度の講義内容の中心となるが、時間が許す範囲で、具体的な聖書テキストの解釈に即した考察も行いたい。

D. 注意事項

- ・レポートによる。（講義内容の理解と、それとの関連における問題の展開を問う。）
- ・受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。込み入った質問は、オフィスアワー（木2、金3）を利用すること。オフィスアワーでの面談は、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）でアポイントメントをとること。

E. 講義スケジュール**前期：キリスト教と政治思想**

オリエンテーション	4/10
1. イデオロギーとユートピア	
1-1：リクール1	4/17
1-2：マルクスとマルクス主義	4/24
1-3：黙示的終末論の系譜	5/22
1-4：ティリッヒ1	5/29
1-5：ティリッヒ2	6/5
1-6：リクール2	6/12
1-7：知恵思想の視点から	6/26
1-8：パウロとローマ帝国	7/3

2. キリスト教社会主義	
2-1: 宗教社会主義—ティリッヒー	7/10
2-2: 宗教社会主義から解放の神学	7/24
Exkurs	
キリスト教と仏教1	5/8
キリスト教と仏教2	5/15
後期: キリスト教と経済・環境 (予定)	
後期オリエンテーション	10/2
3. 自然神学の拡張と社会科学	
3-1: 自然神学とは何か	10/9
3-2: 自然神学と社会科学	10/16
3-3: 自然神学の規範的場としての聖書解釈	10/23
4. キリスト教思想と経済・環境	
4-1: キリスト教思想から見た環境と経済	10/30
4-2: 聖書と環境思想	
1: 創造論から終末論へ	11/6
2: 社会的構想力—モデル、ヴィジョン	11/13
3: エコ・ファミニズム	11/20
4-3: 聖書と経済思想	
1: 経済神学と聖書	11/27
2: 契約思想の射程	12/4
3: イエス、パウロ、黙示論	12/11
4: 賀川豊彦とキリスト教社会主義	12/18
4-4: 現代神学の動向から	12/25, 1/8, 22
1: プロセス神学	
2: 政治神学	
3: 科学技術の神学	

キリスト教思想とコミュニケーション合理性 —宗教と科学、あるいは宗教間—

2012/9/14: 南山宗教文化研究所にて

1 問題設定—他者理解と言語

・星川啓慈『宗教と〈他〉なるもの—言語とリアリティをめぐる考察』春秋社、2011年。

2 キリスト教と仏教

・キリスト教にとっての仏教の意味—近代日本・アジアの文脈から—

近代仏教史研究会・シンポジウム発題 (青山学院大学、2012年5月12日)

3 キリスト教と脳科学

・『脳科学は宗教を解明できるか?』春秋社、2012年8月

「脳科学は宗教哲学に何をもたらしたか」

はじめに

1980年代以降、脳科学は周辺の関連領域を巻き込みながら急速な発展を示している。「人間についてのより包括的な理解のためには、こうした脳科学研究——脳の諸領域の活動に関するマッピング解析——とともに、認知科学、心理学、教育学、哲学、社会学、経済学等を含めた幅広い学問領域を包括する学際的な研究が求められていることなるだろう」と指摘される通りである。⁽¹⁾ これはキリスト教研究を含む宗教研究全般にとっても無関係ではない。ダキリとニューバーグの研究などによって知られるようになった「脳神経神学」（あるいは神経神学）は、すでに一定の研究領域を切り開きつつあると言えよう。⁽²⁾ またキリスト教神学は、新たな脳科学の進展にいかに対応し、関係構築を行うかについて模索を始めつつある。⁽³⁾

一 脳科学をめぐる思想の現在

1 脳科学と宗教研究——脳神経神学？

ジョン・ヒックは、近年『人はいかにして神と出会うか——宗教多元主義から脳科学への応答』で、宗教研究に対する脳科学の影響について、・・・

ヒックと言えば、日本においては宗教多元主義の代表的論客として知られる宗教哲学者であるが、『人はいかにして神と出会うか』で脳科学に関心を向けられるのは、宗教多元主義との関わりというよりも、むしろヒック宗教論のもう一つの中心テーマである、宗教経験の合理性の問い（超越的実在に関わる事柄を経験した人間が自らの経験を受け入れるのははたして合理的なことであるか）との関わりにおいてである。⁽⁴⁾ つまり、ヒックによれば、宗教経験あるいは宗教が非合理的な迷信であるとの宗教批判に対して宗教を擁護しようとするならば、現在脳科学が宗教に対してなす挑戦に正面から取り組む必要があるのである。このような宗教の合理性をめぐる問題状況は近代に特徴的なものであり、これまで、天文学・物理学、生物学などとの間に発生した。それは、「自然主義と宗教」とまとめることができるであろう。⁽⁵⁾ 自然主義とは、人間の経験する諸現象の説明は自然領域内部で可能であり、超自然的原因を持ち出す必要はないとする立場を指しており、歴史主義と共に、近代的知の基本的信念と言えるものである。広い意味での宗教研究には、神学や宗教哲学以外に、経験科学としての宗教研究が含まれるが、経験科学としての現代宗教学は、この自然主義と重なり合う部分を有しており、「自然主義と宗教」との関係をめぐる対立構造は宗教研究自体の内部に存在すると言わねばならない。⁽⁶⁾ それだけに、自然主義は宗教研究によって避けて通れない問題であり、脳科学は現在の論争の争点となりつつあるのである。

脳科学が宗教になす挑戦の内容は多岐にわたっているが、ヒックが紹介するリタ・カーターの次の要約は、問題の現状をよく示している（同書、23）。

1. 「パーシングのヘルメット」によるてんかん発作と前頭葉刺激は宗教的幻想の原因となる。
2. 向精神薬はさまざまな人たちの宗教体験をもたらす。
3. 「純粹意識」、空、無、空性（シューニヤター）の意識は、知覚から取り込むすべての入力を切断したあとにも残存する意識が原因で生じる。

4. すべての実在との一体感は、個人の身体的な境界意識を遮断することで生じる。
5. 神の存在あるいはそのほかの超自然的な存在の感覚は、「自我システム」を二分して一方が他方を別の実体と見るときに生じる。

こうして様々なタイプの宗教経験が、自然主義の立場から脳内の自然のプロセスによって生じるとの説明がなされることになり、これらの脳科学の知見が、宗教経験とは「もっぱら妄想であると主張する重大な論拠」（同書、23）として活用される事態となっているのである。

2 脳科学の哲学

3 ヒックの心脳一元論批判

脳と心の関係をめぐる三つの立場のうち、ヒックがまず批判を行うのは、心脳同一論（Mind/Brain Identity。脳は何かしら特殊な物理的状态ないし過程であって、意識はその脳神経活動、つまり脳の電気化学作用に他ならない、とする理論）と呼ばれる議論であり、それが、強い自然主義あるいは還元主義的物理主義（唯物論）に基づいていることは、すでに指摘した通りである。たとえば、ヒックも引用する、ダニエル・デネットの「一口で言うなら、心とは脳のことである」は、単純ではあるが、わかりやすい例である。この心脳一元論に対するヒックの批判はきわめて明解であり、ヒックの脳科学批判の中でもっとも説得力ある部分と言える。以下の、その要点を紹介してみたい。

なお、脳と意識との関係をめぐるこうした「哲学的問題」に関心があるのは、心の哲学などを専門領域とする哲学者たちであり、脳科学者の多くは必ずしも一元論と二元論をめぐり哲学的議論に興味があるわけではない。脳科学者の多くは、いわば素朴な自然主義において研究を行っているのであって、ここに、哲学者と科学者の意識の差を見ることができよう。

ヒックの心脳一元論批判は、心脳一元論の論理矛盾を指摘する仕方で行われる。まず、取り上げられるのは、心脳一元論者はもちろん、ヒック自身も認める脳と心の相関関係の解釈である。

実際に今日、ほかのことでは意見の違いがあるとしても意識上に生じる変化については、それに対応する変化が脳内のどこかで生じているものと了解されている。このことは宗教体験だけでなく、ほかのどのような体験にも当てはまる。（同書、27）

この脳内の電気化学的過程と意識現象との相関関係は、fMRIなどによって観察可能なものであり、この相関関係は脳の各領域の活動に関するマッピング解析として日々精密化しつつある。この「観察された相関関係だけを頼りにする限り、確実な共通基盤にとどまることができる」（同書、27）。問題は、この相関関係を「同一性」として、つまり、脳と心・意識の同一性を論証する実験的事実と解釈することによって生じることになる。相関関係を同一関係あるいは因果関係として解釈し自らの議論に説得性を持たせる論法は、それ自体はよくあるレトリック（だまし、詭弁）であるが、その論理的な不当性はステーブン・ローズなどの脳科学者も認めるとおりである——『相関関係は原因であるとはいえない』ことは明らかである」（同書、28）——。

心脳同一論者の議論の問題は、「相関関係＝同一性」の主張だけではない。ヒックの指摘するように、脳科学においては、近世哲学に至る哲学的伝統で心を論じる際に通常用いられた「内観からの証言」は無視することが適切な態度とされる。脳科学において依拠されるべきは、脳内に生じる計測可能な物理的变化であって、「内観において私たちが直接

S. Ashina

に自覚する意識の流れ」に訴えることは、「日常言語の初歩的な心理学分類」（チャーチランド）として退けられる（同書、28）。

「相関関係＝同一性」の主張と内観の無視に共通するのは、論点先取の誤謬である。つまり、脳と心の相関関係が脳と心の同一性であるとの主張が可能になるのは、論証に先立って、暗黙の内にであれ、脳と心の一元論が選択されているからであり、前提をあたかも論証の結論として反復している過ぎないのである（循環論法）。内観において自覚される意識現象（たとえば、感覚的なクオリア）が脳内の電気化学的過程とを同一視されるという前提に立って議論を進める場合、脳科学者が電気化学的過程を計測することによって意識現象を説明できると考えるのは当然のことと言わねばならない。

4 ヒックの随伴現象説批判

5 ヒック説の批判的検討

本節の考察をまとめておこう。ヒックは、心脳同一論と随伴現象説という自然主義的な脳科学を批判し——ヒックはこの連関で弱い自然主義と強い自然主義の区別を行っていた⁽¹⁷⁾——、自由意志（心が脳に影響を及ぼす、下向きの因果性、心的因果性）の擁護することを試みる。しかし、このヒック自身の議論もまた論点先取を行っているおり、ヒックの批判にもかかわらず、創発性の議論（創発主義）は追求すべき選択肢としてまだ生きている。これが、次項のテーマであって、ヒックの立場は、強い創発主義と両立可能であることが論じられるであろう。

二 創発主義と宗教哲学

1 創発主義の射程 2 創発性と生命 3 創発性と心 4 神と創発性——超越あるいは深み

おわりに——宗教研究にとっての脳科学の意義

結論的に言えば、現在のところ、あるいは当分の間、宗教研究者が脳科学の成果に一喜一憂する必要はない、冷静な対応で十分であると思われる。たとえ、脳の物理的活動が神イメージを生み出すこと、あるいは宗教経験が脳のどの領域と関わっているかが解明されるとしても、それは神の存在の否定にはならないからである。実際、還元主義的物理主義に立つ脳科学者や哲学者が素朴に考えるほどが、神の非存在の証明は容易なものではないのである。また、ヒックが指摘するように、宗教経験にとって重要なのは、短期的な経験の有無ではなく、それが長期にわたる意識的な努力のプロセスにおいてもたらず結果（成果・実）なのであり、それは、現在の脳科学が行っているような実験の範囲を遙かに超えた時間経過（場合によっては、人生の全体）において批判的に検討されるべきものなのである。

もちろん、脳科学が宗教研究にとって無意味であると考えする必要はない。⁽²⁶⁾たとえば、「二 創発主義と宗教哲学」で見た創発主義の議論は、自然理解の精密化という点で、キリスト教思想あるいは宗教哲学に大きな寄与が期待できる。それは、ティリッヒにおける生の次元論など、自然哲学の系譜に位置する様々な構想と結びつけられることにより、人間にとって宗教とは何かという宗教哲学の根本問題への新たなアプローチを可能にしてくれるであろう。論者の私見では、創発性や次元論は、自然主義からの批判に対して宗教的実在論を展開する上で不可欠のものとなるはずである。ここに創発主義的な次元論とそれ

に基づく心脳関係論を一つの土台とした「自然の宗教哲学」の構築の可能性が展望できるであろう。

しかし同時に留意すべきは、こうした仕方で脳科学の成果が宗教あるいは宗教研究に本格的かつ積極的に関連づけられる場合に、それは伝統的な神理解や宗教経験理解に大きな変更をもたらす可能性がある点である。前項で見たように、創発主義において提出される「自然的な神」の議論が示唆するように、キリスト教的な超越的人格神についての伝統的理解をそのままの仕方で維持するには大きな困難が予想される。神理解の転換は、最近の「宗教と科学」関係論において、たとえば進化論や遺伝子工学との連関で、すでに生じている事態であって、⁽²⁷⁾この点でも、「脳科学と宗教」というテーマは近代以降の思想的文脈に位置しているのである。いずれにせよ、脳科学からの挑戦に対して、宗教思想また宗教哲学は、その基盤からの再考が求められているのであって、まさにここに現代における宗教哲学が創造的に飛躍するチャンスがあると言えよう。

<文献>

- ・ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うか——宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館、2011年。(John Hick, *The New Frontier of Religion and Science. Religious Experience, Neuroscience and the Transcendent*, Palgrave, 2006.)
- ・Philip Clayton and Paul Davies (eds.), *The Re-Emergence of Emergence. The Emergentist Hypothesis from Science to Religion*, Oxford University Press, 2006.

4 対話とコミュニケーション合理性

<本日の本論>

(1) キリスト教思想をめぐる二つの対話

1. 他の諸宗教 (宗教間) : 資料1・2
2. キリスト教と世俗的知 (科学) : 資料3
3. 対話の前提としての他者あるいは多元性、
他者理解は可能か、
4. 理解とは、コミュニケーションにおける他者理解と自己理解
5. 対話の必要性 : 課題としての共通性
6. 対話の可能性 : 柔らかい弱い人間性→コミュニケーション合理性
本質主義・実体形而上学へ復帰することはできないとしても

(2) 対話の現実性 (現象学) : 具体的な実践領域としての二つの対話

現に行われている対話からその可能性へ

cf. 理想的な対話とその実現不可能性の議論
翻訳の問題

(3) 哲学 (人間理解から人間的知のネットワークへ) と自然神学の役割

二つの対話の類似性と相違の解明

対話についての反省的な掘り下げ

↓

共同研究に必要性和哲学の役割